Joker—Angel Ripper

萬三昧

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０２ｘ年、小さな祝福と呼ばれた日があった。その言葉の通り人々は小さいながらも幸せという祝福が訪れた。

しかし、物事というものには釣り合いというものが存在する

黒髪の少女は千円を拾った。

緑髪の少女は傷を負った。

黒髪の少女はその千円で少女にしては豪勢なものを夕飯として食した

緑髪の少女は記憶を失った。

そして二人は出会う。まるで、運命がせせら笑うように。

さぁ、始めよう。これは二人の少女が各々の成したい事のために抗う物語だ

目次

【邂逅、そして異常】――――――1
【異変、そして闇蠢】――――――13
【ひとまずの区切り、ここから始まる】26

【邂逅、そして異常】

２０２ｘ年、春。その日日本では祝福の星と呼ばれた流れ星が流れた。
突如流れた緑色の流れ星。
その光を見たものは翌日、小さな幸運に恵まれた。
落ちていた１００円を見つけたり、不仲だった友人と仲直りしたり、少しだけ、スーパーが値引きした上にスーパーの利益が少しその日は増えたり……と、
海桜奏（みざくらかなで）、その少女もそんな幸運に恵まれたごく普通の少女だ。
黒髪の少しだけ天然のウェーブがかかった小柄な少女だ。親は海外移動で、実質ひとり暮らし、趣味は音ゲー、特技はローラースケート。そんなありきたりな少女に降りかかった幸運は。
クジで１０００円当てたこと。それだけだ、いや、小さい幸運にしては大きいものか、とにかくその翌日、いつも自炊で音ゲーの機器や音ゲーに当てるための金を少しでも作ろうとしていたが、たまにはと思いファミレスで夕飯を食べた。その帰りだった
「ふは～……♪」
音ゲーを食後に満喫し帰路へ着く。昨日と違い少し雲がかかっているのを除けば素

晴らしい一日だったと悦に浸る。
「む～……しかしデニムはどうしても嫌いだなぁ……うむ、そのデニムこそ我の糧とか言ったやつ、出て来い」
と、やはり音ゲーの愚痴を漏らしながら歩く。
「だいたい弐寺って、あれなのよね～……ＢＭＳと違って独特の空気があるって言うか……」
と、ボヤきながら歩くとービチャ……
と、音が。
水溜まりにでも足が触れたのかと思い見ると、
【ドス黒い赤い液体が奏の足を染めていた】
「……え……？」
今まで悦に浸っていた態度とは一転、緊張半ば生理的恐怖が身体に走る。それ以上いくな、それ以上いくなと本能がブレーキをかける中、本能が足を掴んで動かす……そんな矛盾した感覚に陥りながら……歩みを進めた
ー結果がどうだ、人が倒れていた
人が倒れていた血を「え……」出して人が倒れていた
人が倒れていた「う……」血を出して

ドス黒い血を出して死に絶えた「あ、」ように人が倒れていた
１６歳の奏よ「ああ……」り幼そうな子が「あああ」血を出して倒れていた
髪の緑色と「あああ」累色である赤「ああああ」色の液体をまき散らして倒れていた。
今にも死にそう「あああ」な身体で横に「ああああ」倒れていた
最後の望みを見たように緑髪の少女が倒れ「あああああああああああぁぁぁあああ
あああああぁぁぁあああーーーーーーーーー!!ーーーー!!ーーー!!ーーーーー
!!!!!!!」

非日常な光景に認識がようやく追いついた。生理的に嫌悪する生臭い鉄のような匂いが鼻腔を刺激した。本能が嫌悪を示した。内臓をを動かした。トマトやレタスや肉の塊が踊り狂い外に出ようとした、口を抑えて堪えた。堪えた、堪えた堪えた。堪えきった。

……目を閉じて嘘だと信じたかった。しかし真実を目は捉えてしまった。ショックが脳に染み込んだ。覚えてしまった。消せない。

…………

幾許かの時を経た。体感にして1時間、1日……1年……長く長く、感じ取れたが、それでも、視界の隅に入る夜空がそれほど時を経ていない事を奏に伝える。

「は……ッツ……は……ッツ……は……ッツ……」

溺れた子供が必死に水面に顔を出して醜くもがいて酸素を求めるように荒い呼吸を2、3度する。

「なに……なんなの、よ……これ……ッッ!?」

しかし、パニックが今度は訪れる。自らを見失わないように、言葉に口にしたが、答えはどこからも聞こえなかった

「っぷ…！」
パニックが落ち着こうとすればにおいでまた吐き気が戻りパニックになりかける。
再び口に手を当てて格闘。
下を向き声にならない声を出しながらどうにか落ち着かせる。
「きゅ、きゅうきゅう、救急車…そうだ、救急車!!」
慌ててカバンの中をひっくり返しスマホを取り出す…が、
「何でよ、何で繋がらないのよっっ!?」
ガタガタと手を震わせながら１１９，１１９と何度も打っては発信、打っては発信を繰り返すも、呼び出し音どころか通話中の音も出ない、無音なのだ。
スマホ本体の音を最大に変更しても意味がない
「…ど、どうすんのよ、どうするのよこれッッ!!」
またパニックに陥りかけるがはっ…、はっ…という焦りから出る浅い息の音が何とか最後の頼みの綱を握っているかのように奏の理性をつなぎとめている。
だが…
―ガキィィィィンッッ!!という甲高い金属音が地面を揺らす振動とともに奏の耳

に背後から勢いよく入る。
「ひっ…!?」恐る恐る見ると、短剣が一振り地面に突き刺さっていた。黒色の握りに赤の鍔が装飾されたところ以外は何の変哲のない銀色の刃を持った短剣である

「…な、何よ、こ、これ…!?」
恐る恐る振り向いてゆっくりと短剣を地面から抜く、運が良いのかそこまで深く刺さってはいなかったので簡単に抜けた。
「…ま、まさか」
ここで奏はある一つの最悪の可能性を考え付いてしまう
―これは目の前に深手の傷で倒れている少女に傷をつけた張本人からのメッセージ、【立ち去らねば殺す】と、いう。
そんな考えを思いついた時だった
「いたぞ!!」
という男の声が【頭上から】聞こえた
「え…?」
空を見るとそこには、十人ほどだろうか…まず、一様に同じ白色の甲冑で顔を隠しているのに目が行く…そして最大の違和感、背から明るい黄色の羽をはやした集団が一様

に同じデザインをされた槍を持って、フワフワ…と、地面からちょうど一軒家の二階くらいの高さに浮遊していた

「な、何よ、何なのよ、いったい何なのよ!?」

驚きに目を丸め恐れるように焦点が合っていない目で奏は集団を見つめる。

だが次の瞬間、―パァンッッ!!と空気がはじけるような音を出したのに気が付いた時には

―ドォォォンッッ!!轟音とともにブロック塀に地面に体が埋まっていた

「かはっ…」

喀血の様に切れた唇から血を撒き、肺の中に納まっていた空気がすべて吐き出された。

「…」

あまりに突然のことで何が何だかわからない。やがて意識をやけでも起こしたような靄がかかった感情とともに手放そうとした

「馬鹿者!!」
と、集団のリーダー格らしき人物が光撃の魔法を打ったメンバーを叱責する
「で、ですが、あのままではガブリエル様は襲われていたのかもしれませんよ!?」
「…まぁ、いい。ひとまずはこれを使って早く傷を癒させなければ…」
そういうと虹色に光る小さな極小の粒を緑髪の少女の傷、その一番ひどい背中に当てる。すると一瞬のうちに傷は癒え数瞬のうちに目も覚ました。
「ご無事ですか、ガブリエル様…!?」

そう安堵したかのように話すリーダー格のメンバー
だが少女は
「あ、ああ…」
「?が、ガブリエル様?」
「い、嫌！来ないで、来ないで、殺さないでッッ!!」
パニックに陥ったように手を左右に振って逃げ出そうとする
…そう、見ていたのだ。駆け寄った少女がいた事を、その少女が自身のために手を施そうとしていたのも、その少女が吹き飛ばされていたのも、それ故に目の前の集団を敵と思い逃げ出そうとする、が。
「お待ちください!!」
と、リーダー格の人物が手をつかんで動きを抑える。
「隊長!!」
「くっ、まさか予見が的中するとは…仕方あるまい、今一度眠ってもらうしかないな」
「では、あれを…?」
「ああ、麻酔を…」
と、やり取りをしたのち別のメンバーが取り出したのは小さな注射器
「あ、や、やぁ…!!」

「ガブリエル様、申し訳ありません…今はお休みに…!!」

そう言い注射器を少女の首筋に当て薬を流し込む瞬間だった

―轟ッッ!!という爆発のような音と共に注射器は粉々に、そして注射器を打ち込もうとしたメンバーの腕が飛んだ

「あ、がぁぁぁぁあぁぁあああああああああ!!」

のたうち回り、腕があった場所を抑えるメンバー。その脳天を―グシャアッ…!!とい

う音共に衝撃が走る

―バタッ、という音共に倒れこんだメンバーの一員は意識を失った

「き、貴様あああああああああ!!」

睨みつけんとばかりに甲冑の集団が槍を中腰に構える

「あ…。っ!!」

一方緑髪の少女は驚きとそしてかすかな希望を見つけたように、凶刃を放った張本人を見張った

そこにいたのは、先に落ちたナイフを持ち先の返り血を顔に少し浴び、煌煌と紅い煉獄のような炎を体現したような目で甲冑の集団を睨む、奏だった

【異変、そして闇蠢】

吹き飛ばし、その上意識を手放させた隻腕の甲冑の人物を、まるで生ごみでも見るような嫌悪する目で奏は見る。

「貴様、このような狼藉。ただでは済まさんぞ!!」

リーダー格らしき吹き飛ばした人物と同じ甲冑姿の男の怒声を無視し、隻腕の人物にどこからか、奏はトランプを一枚腕の切り口にねじ込む。

絵柄はハートの１０。するとたちまち切り落とされた腕が生き物のように持ち主のもとへ戻り、何事もなかったように無事一つに戻った。

「…な」

さすがの男もこれの光景を見て押し黙る。

すると、

「…　１０秒」

と、奏は小さく言葉を放つ。そしてもう一度…

「１０秒、それまでにその子を置いて消えなさい」

その言葉を聞いて押し黙る甲冑の集団。

しかしリーダー格の男が
「ふざけるな！逃げるのはむしろ貴様のほうだ!!慈悲のある今のうちに疾くと消え去れ!!」
と吠える。もちろん緑髪の少女の腕を握ったまま。
「…」
その握る腕に視点が当たる
１０
呼吸を整える
９「おい、聞こえているのか!!」
短剣を握る右手を一瞬緩ませる
８
右手を前にゆっくりと出す
７
目を閉じて耳を澄ます
６
持ち手の感覚をしっかり感じる
５

カードを握る
4「今すぐその武器を置いて疾くと去れ!!」
絵柄はスペードの8
3
目をうっすらと開く
2
あの子の目、怯えてる
1
ナイフを手から離す
0「よし、それでい…」

―轟ッッ!!
まるで弾丸のようには垂れた奏の身体は一瞬のうちにリーダー格の男との距離を詰めていた。
「な〝っっ!!」
気が付くもすでに遅い。
ナイフを手放しているのを見ていたが故に、油断していた男は防御も回避も間に合わ

ない
対して奏は飛び出したと同時に屈んだ格好で短剣を手に取り、ゆっくりと全身の力を使って体を右捻りさせ、
「お返し」
そう言うと足、腰、上体、腕を伝い
―ズバァァァァンっ!!と、短剣がリーダー格の男の少女の腕をつかんでいた手に当たった瞬間、右手を弾かせるようにインパクト。
初動で使ったエネルギーだけで相手を吹き飛ばす
「がはっ…!!」
そして先に奏が弾き飛ばされたブロック塀にきりもみ回転しながら体全体が塀にめり込む。
ガチャ…という思い鈍い甲冑が音を立てて動かなくなる
「き、貴様あああああああああ!」
激高し、槍を勢いよく上に振り上げて刃っ先を奏の脳天にめがけて振り下ろさんとするまた甲冑チームの一員
だがしかし、大ぶりなモーションが仇になる
振り下ろしたその腕を奏は掴み、その勢いを受け止めて殺そうとはせずあえてその力

を体全体で地面に伝えるように足を曲げる。
そして少しつかんだ腕を手前に引くように力を加える、するとどうだ。グルンっ!!と身長１５０センチの奏よりも大柄な甲冑は宙を舞い背中から地面へと倒れる。
すかさず、体を捩じると。―カァァァンッッ!!という甲高い音と共に甲冑の頭の向きが地面と平行になるように一蹴り入れる。
その左右から槍で突き刺そうと突進する二人組
息をひそめ声も出さずに貫こうとする辺りから隙をずっと狙っていたのだろう。
しかし、軽いステップを踏む後ろに3歩、軽やかにコンクリートの壁の前まで下がると、その壁を使ってバネの様に足をコンクリートに押し付けて膝を曲げると、限界まで押しつぶされたばねが飛び跳ねるように、一気に右の敵の顔面に飛び込むように接敵。
驚くように一瞬後ろに体を傾ける敵の頭の甲冑を両手で鷲掴みにすれば、膝蹴り。そこからヘッドロックを足でキメて太ももの甲冑で覆われていない部分を的確に狙い靭帯を短剣で切断
「――――!!!!」
声にならない悲鳴を上げて倒れこむ甲冑を尻目にもう一方の甲冑にかみつく獣のように飛び込むと地面と平行に身構えていた甲冑の槍を踏み台にして頭上を跳び、そのまま背後をとると、また太ももを切り付けてバランスを崩させると一気に押し倒して、喉

元の布地の部分に肘を押し付ける

「あが…っが…」

泡を吹いて窒息しそうな声を出しだすがそれを尻目に皿に押し付ける。やがて胸部が本当に小さく上下するだけ、声も出なくなる。それに気が付くと肘を離して残る甲冑たちのほうを見る。

騒然とした様子で、槍を構えるその姿は狐に化かされ呆然とする狩人のようにも見える

そんな甲冑どもに奏は刃の切っ先を向けて睨みつける

「…消えなさい」

そうただ告げる、だがしかしそこには凄みがあった。立ち去らねば殺しかねないと云わんばかりの凄みが

しかしまるで地面に差し込まれた棒のように突っ立っている甲冑達に負傷した甲冑たちを一体一体、丁寧に投げ捨て渡す

「…」

「「「「「…!!」」」」」

しばらくの時を経る…そして…

「…撤収だ」と甲冑の内の一人が言うとけが人をそれぞれ背負い空へと旅立つ

しかし、撤収を命令した甲冑は一瞬浮遊、奏のほうを向く
「貴様は、私たち天使たちに刃を向けた。このことを覚えておけ。いつか我らが大天使長様が貴様の首をはねに来るだろう！」
そう吐き捨てると今度こそ甲冑たちは天へと吸い込まれるように飛び立った。

甲冑たち飛び立ってしばらくして…

「…　はぁっ！」

息苦しさから解放されたかのようにペタン…　と地面にお尻から座り込んでしまう奏。

「な、何だったの、今の動き…」

そういいながら自分の手を、足を見る奏。

いくら昔やっていて今も特技であるローラースケートの動きを体が自然に使っていたとしても、あんなにもスムーズに敵をせん滅するような動きができるだろうか…？

と、自問自答を繰り返していると…

「あ、あの…」

と、恐る恐るといった口調で緑髪の少女が緊張した強張った面持ちで近づいてきた。

「え、あ…」

一瞬呆けたように少女の顔を見る。

ポニーテールに束ねられた緑髪故にボーイッシュに見えるものの、顔つきがまるで創られたものの様に整い、かわいらしいもの故に女である奏さえも一瞬見惚れてしまう。服装は動きやすそうなグレーの服に白を基調として金色の模様がつけられたボロボロの手甲。そこにオレンジに赤を混ぜたよう色のホットパンツ姿そして首元には赤いマフラーが、まぁ今はその全部が全部煤や傷で汚れボロボロなのだが。

対して奏は紺を基調とした通学する高校基準のスカートにブレザーにリボンとカッターシャツ。当然こちらも煤で汚れてしまっているのだが
「ちょ、え、あなた…　大丈夫なの、歩いても…　!?」
と少女の全身をペタペタと触りながら、傷はどこに行った!?と言わんばかりにくまなく全身を見る奏。
「え、あ、はい…　その、えっと…」
「何で、あんなにも重傷だったのに…　どうやって…」
そういいながらペタペタと少女の背中を触るが傷跡さえ背中にはなかった
「あ、あの…　っ」
と、少し声を詰まらせるように少女が奏に訴えかける
「な、何?」
「え、えっと、その、背中の、布が…」
「…あ」
ここで奏は漸く気が付く。少女の服の背は傷を負った際に大ダメージを受け、布地がなくなっていたのだ。つまり、背中が丸見えなのだ。
どうやらその状態で思い切りペタペタと触られるのが相当羞恥心をあおっていたのだろう。

「あ、ご、ごめっ!!」
「い、いえ、私のほうこそ…すみません…」
先までの緊張した殺伐とした空気はどこへ行ったのか…何とも言えない空気管が二人の間を漂う。
「と、とりあえず。アンタのいえまでついてったげる。また襲われないこともないかもしれないし…どの辺住みなの?」
そういって奏が空気感を払拭しようと声をかける。が…
「…」
少女は悲しそうに表情を曇らせ首を左右に振ってこう言った
「… 覚えていないんです。自分のことも、あの人達の事も…」

「えー？やられちゃったの～!?」
「も、申し訳ありません!!」
そういって片膝をついて報告するのは先の襲撃犯の一人、声からして若い男のように聞こえる。
その報告を聞くのはピンク髪をポニーテールでまとめ黄色の上着に明るい赤色のスカートをはいた明るい笑みを浮かべた表情をする少女

そしてもう一人、金髪のポニーテールを先の少女と左右対称の向きに束ね紫の上着に紺色のスカートを履いた少女

互いの瞳の色は同じ輝くように明るいオレンジ色。笑みを浮かべる少女とは対照的に金髪の少女はジト目で感情をのぞき込みにくい表情なのだが…

「ま、いいや♪とりあえず怪我した子たちの治療は？」

「全員気絶していますが命に係わるけがはないとのことで治療のほうもそろそろ終わるかと」

と、ピンク髪の少女の質問に答える甲冑姿の男、すると金髪の少女が。

「襲撃犯は、堕天使？魔物…なの？」

と聞く、すると甲冑の男はおびえたように

「…に、人間の、女…です。短剣一振りで、次から次へと…　仲間を…」

と、息を詰まらせるように答えた

「人間の…女…なの？」

「えー？人間に擬態した魔物か堕天使か、悪魔じゃないのぉ～??」

「い、いえ！レーダーも人間と出ていました。現に仲間の一人がガブリエル様の保護のためにその女に攻撃したときは人間らしくしっかりと塀に埋もれるように吹き飛ばされていました…　ですが、ガブリエル様の気が動転されていたので少し麻酔薬でお眠り

いただこうとした際に…あの女が兵士の一人の腕を…!!」
「…　わかった、もういい。下がって、なの」
　怒り、恐怖、様々な感情を吹き出すようにしゃべる甲冑の男の声を制止させ金髪の少女が告げる。
「…　は。失礼しました。…　では、私はこれにて」
「うん！お疲れさまぁ♪」
　というやり取りをした後に、甲冑の男は部屋を後にした。
「う～ん、人間の女の人が天使相手に、かぁ。いろんな人がいるんだねぇ外の世界には、」
「…　でも、人間相手なら」
「うん！」
「「私たちの敵じゃない！（…　！）。あ、ハモっちゃった♪」」
　ころころと純粋無垢な笑みで二人は笑った

【ひとまずの区切り、ここから始まる】

「…　やはりあの子は」

……

「ああ、報告は聞いている。だが状況を見る限り敵と断定するにはまだ早い…」

……

「それは分かっているさ、だが悪人特有の邪悪な気が、彼女には…」

……

「なら、あくまでまずは言葉で、力を使うのは最後の手段で…」

……

「では。オーブよ、永久に……」

……

ホログラムのウインドウを切ると姫騎士という言葉が似合う姿の女はそっと目の前にある旗を握る。まるで、何か希望に、はたまた大いなる何かに縋るように……

「なにも、どうか、あの子に何も起こりませんように……」

27　【ひとまずの区切り、ここから始まる】

―甲冑たちの襲撃の後騒ぎになるのも面倒だということで逃げるように緑髪の少女と家に駆けこんだ奏。

―パチ

そんな軽い音と共にスイッチを押すと玄関からリビングにかけて白く明るい灯が灯る。

スイッチを押した家主は靴を脱ぎ捨てて廊下に上がり、招かれた少女は玄関先で固

まっていた。

「……？　何してるのよ、さっさと入ったら？」

そんな言葉とともに声をかけると、氷漬けにされていた体が一瞬で解凍されたかのように

「は、はひっ！　で、では、お、お邪魔します、ね……？」

スっ……と、奏とは対照的にゆっくりと落ち着いた品のある動きで靴を脱ぎ、揃えて玄関の片隅に置く

一方でダイニングキッチンにて奏は透明なグラスを二つ取り出すとピッチャーに入れた麦茶を取り出して均等に二つのグラスに注いでいく。

―コトっ、という音と共に一方をダイニングテーブルの自分の手元に、もう一方を今この場に来ようとしている少女のもの用として奥に置いておく

「あ、えっと……」

簡素なダイニングに家族用の大きさのダイニングテーブルと机。テレビラックにソファ。多少の生活感を醸し出すように無造作にソファの上には靴下が投げ捨てられている。

「……とりあえず座る？」

「……じゃあ、遠慮なく」

そういうと二人はダイニングテーブルに面を向いて座る形で椅子に腰を掛ける
「……で？　あんた結局何者なの？　ってか、本当に何も覚えてないの？」
そういいながら椅子の上に片足を組みグラスをゆらゆらと、回すように揺らしながら、目の前の少女に問いかける
「……すみません、本当に、何も……」
首を振り自らの身に起きた事さえ何も知らない焦り、空虚感……その他諸々が詰まったものを、だが吐き出さず、こらえる様に膝の上でこぶしを強く握りしめながら俯く
だが、そんなこと知ったことかと言わんばかりに
「まぁ、覚えてないなら覚えてないんだし。それは今は置いとこ」
と、あっけらかんとした様子で奏は言う。
それにー……と言葉を続けて
「べつに、無理に記憶を引き出したってそれが幸せなものかどうかなんて保証はないんだから。思い出して不幸になったらそれはそれで損でしょ？　なら、今は何もしない。それが賢明だって私は思う」
—まぁ、私自身無理やり記憶を戻して仮に心が傷つくなんて事が起こったら嫌だしねと、笑いながら一気にグラスの半分の麦茶をあおるように喉を通して流し込む
先までの戦闘の様子とは打って変わって年相応の笑みを浮かべながら話すその様子

は朱所からすればお姉さん、そんな風にも見えた
「……でも、帰る場所も思い出せないのは」
と、少女は口を開く。だがその言葉は少女の心を苦悩させる。帰る場所がないというのは一人ぼっちで自分の居場所もないのに徘徊しなければならないのだ、自分の元居た場所へと。それはまるで出口のない迷路の中を一人で永遠と歩き続けるようなものだ。
自分の言葉で認識させられる少女、そんな覚悟もないが赴かなければいけない。向かいたくもない死地に行けと命令された兵士の様に黙って現実を受け入れようとしながらも心の中では拒絶する、そんな葛藤によく似たものを抱え込みまた俯いてしまう。
だが少女からすればただ俯いているように認識されたが奏には
「な～に、泣きそうな顔してんのよ」
ハッとして前を向くと目の内側の堰があふれそうな感覚と、唇を強くかみしめていたことに気が付く。
「別にいいじゃない、帰る場所が思い出せなくても当分一年かそこらはこの家にいれば。幸い親もいないしね」
カラカラと明るい笑みを浮かべながら奏は言うが、当の少女は
「……」
呆然としていた。いくら自分の住む場所を覚えていないからと言っていきなり阿吽

の呼吸の様にじゃあ、住んでもいいですよだなんて虫が良すぎる。都合がよすぎるのだ。もし厄介だけど仕方ないから、という理由なら尚更だ。

だが奏は次にこう言った

「いや、さ、実は記憶がないって言われてからここに帰ってくるまでの間に考えて決めてたのよね」

「それって……」

「もちろん拒むなら無理やり押し付ける権利は私にないし、今の提案を飲む必要はアンタにはない。逆にアンタがここに記憶が戻るまでの間でもいいから居たいっていうなら私は拒まないし歓迎するわ」

「……」

ふと、少女に迷いが生じた。本当に厄介になってもいいのだろうか。それと同時に厄介になったとしても何かそれ相応の対価を求められるのではないのではないのかと。

「それに、今度アンタ一人でいたら今度こそ捕まるわよ。あのよくわからない真っ白甲冑集団に。それくらいなら、私の家で多少守れることのできる人間といたほうが得策じゃない？」

……その追い打ちはひどく響いた。ずるい人だと少し思いながらも内心はなぜかホッと、安心してしまう自分に不思議さを覚えながらも。

「じゃあ……その、不束者、ですけど……」
　と、ゆっくりとではあるが何とか自然体に近づく。
　少なくとも奏の目には言葉を言う少女の姿はそう映った
「んじゃ、契約成立ね。ガブリエル」
　そういうと、また明るい帆ガラナ笑みを浮かべる奏
「……ガブリエル？」
「ああ、そう言えば自分の名前知らないんだっけ。まぁ、私も知らないんだけどさっきの甲冑どもが言ってたのよ。ガブリエルって、意味は祝福を伝える天使……ってとこね」
「……祝福」
「まぁ、でも祝福を告げる天使の名なんて縁起良いじゃない。私はいいと思うけど。アンタはどう思う？」
　一瞬悩むようにまた顔を俯かせる。だが、思いが決まったのか顔を上げる。
「じゃあ、今は。ガブリエル……で。私はガブリエル、です」
「オッケー、んじゃよろしく『ガブ』」
「……ガブ？」
「ほらガブリエルって長いじゃない。だから短くしてガブ。私はかわいいと思うしいいと思うけど。アンタはどう思う？」

「……変な感じ、はしますが。でも嫌いじゃないです。その呼び方」

かくして少女ガブリエルと奏はともに行動することになった

カラカラと笑みを浮かべる奏に感化されたのか、クスッ、と少女―ガブリエルも曇ったり緊張した顔つきとは異なる、純粋なほほえみを浮かべた

教会の聖堂―その中に一人の神父が立っていた。黒い司祭服に身を包み、肌の色は焼けたように黒く顔の目元などの彫は濃く、いかにも私は外人ですと言っている。

だがその瞳は威圧するものではなく優しく穏やかに一点を―祭壇の奥にそびえたつ

十字を見つめる。
「そうですか、それはそれは……」
誰とも話していないが誰かと話しているかのようにつぶやく。満足げにうなずくその様子は迷える魂が、路頭に迷いもがき苦しんでいた人間が自らの導きで正しい元の居場所へ戻った時の光景を見つめる聖人。そんな言葉が似合う
「終局の笛は、此方にあります。しばらくは、何者の手にも触れることはできませんので、安泰でしょう」
また聖堂の中でひとり呟く、相も変わらず返事はない
「ええ、彼の方もさぞお喜びでしょう。では、これにて」
そういうと、甲高い音と共に右手に持っていたステッキを地面に鳴らす。
「あとは、彼女がどうなるか。ですね」

37　【ひとまずの区切り、ここから始まる】

ビルが立ち並ぶ市街地。その中でも人期は高い高層ビルの最上階のバーの窓堰。光り輝くビル群を見下ろしながら、黒いスーツを着こなした女はそこで一人スマホを手にして耳に当てていた

「ええ。本来の墜落予想地点、及び周囲五キロ圏内に主に目立った痕跡はありませんでした」

そう言うと耳元に当てたスマホから男か女かわからない微妙な声質の音声が流れる

「いえ、主な痕跡がなかっただけでそれらしいものは」
と、話しているとバーの店員が氷の入ったカクテルタンブラーと皿に乗った炒ったピスタチオを盆にのせ女の手前にある小さな机に提供する
酒の銘はガブリエラ
レモネードを主とし、ウォッカ、ブルーキュラソー、リキュールを入れスプーンで一、二回ステア（かき混ぜた後）ベルノ―をフロート（浮かばせた）ものだ
「ええ、とある少女の家に。迂闊に今は行動できない状態になったようにも思えますが…」
―ありがとう、と店員に言葉の代わりに軽く会釈をすると判断を仰ぐようにまたスマホに声をかける
しばらくーほんの２．３０秒ほどした後に一切前後左右に動かなかった頭が軽くうなずくように上下に揺れる、そして
「わかりました、例の計画と共に暫くは放置しておく形で……」
―ではまた、と言うと。女はスマホを鞄の中にしまい、カクテルタンブラーに手を伸ばす。
一口含み味を楽しむと、町の喧騒に耽るように窓の外を見る。
その目に一瞬、二重の光が一瞬だけ映り込んだが。気にも留めずにまた一口含むと、

煌煌と光る世俗に魅入られるように大小さまざまな光が蠢く様を眺めていた